歴史のまち　久留米
ストーリーシート９

はじまりは足袋（たび） －ゴムのまち久留米の歩み－

1　新しい産業の息吹

廃藩置県から２年後の明治６年（1873）10 月。江戸時代そのままの生活が続く久留米の街で、今日のゴム産業につながる歴史的な第一歩が踏み出されようとしていました。

現在の市役所と池町川の間にある米屋町の一角に小さいながらも独立した店舗を構えたのは、23 歳になった倉田雲平その人でした。店名は「つちやたび店」。開業資金は３人の兄たちが好意で貸してくれました。雲平は３年余り長物（和服）の裁縫を修行してきましたが、その将来性に見切りをつけ、足袋の製造に特化しようと決意したのです。

同じ年、石橋徳次郎は祖父である緒方安平の嶋屋に入り、商売の道へ踏み出しました。彼は後に「志まやたび店」を創業することになります。

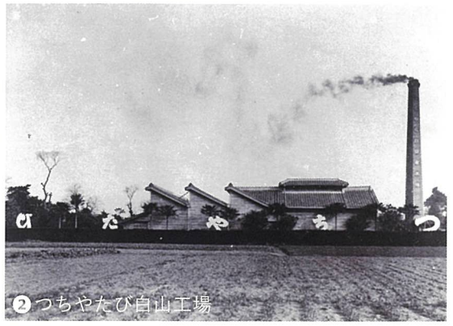
❶米屋町に開店したつちやたび

2　軍都久留米の躍進

明治 22 年（1889）４月１日、わが国で初めて市制が施行され、久留米市は 31 市中最小の市としてスタートしました。市域はわずかに旧城と城下町のみで狭く、九州鉄道久留米駅が開業したとはいえ、各種産業も低調であり、経済的に発展の余地がありませんでした。

ところが、明治 30 年（1897）に陸軍歩兵第 48 聯隊（れんたい）、同 40 年（1907）に第 18 師団の誘致に成功すると、市内外で兵舎や軍事施設の建設ラッシュとなり、各施設と駅を結ぶ道路などのインフラ整備が進みました。

また、当初は 24,750 人だった人口も、大正９年（1920）には 43,629 人と約 1.8 倍に増加しました。近郊では、農業から商工業への業種の転換が進み、久留米経済は不景気知らずと言われました。



❷つちやたび白山工場

3　工場生産化するたび工業

足袋の需要が増す中、「つちやたび」では明治 27 年（1894）から生産力向上のため、ドイツ製ミシンを購入しました。その後、「志まや」でもミシンを導入して、両社は手縫いから急速に機械化を進めました。

翌年、京都で開催された第４回内国勧業博覧会の会場は熱気に包まれていました。久留米の「つちやたび」と「志まや」が出品した「足袋」が揃って褒賞を受けたのです。久留米の「足袋」の優秀さが全国的に認められたことをきっかけに、両社は躍進のスタートを切ったといえるでしょう。

同 40 年（1907）、「志まやたび」もたび専業に踏み切りました。同時に職工の徒弟制度を改めて、有給制度を導入、人材の育成と作業の能率化をはかりました。翌年には荘島町（しょうじまま）に工場を建てました。同年、「つちやたび」も白山（しらやま）に工場を移転し、両社の工場生産も軌道に乗っていったのです。

4　営業宣伝の新機軸

いつの時代も人々の関心は目新しいものに向かいます。大正３年（1914）、「つちやたび」では当時珍しかった民間航空機を使った宣伝を行いました。第 18 師団の練兵場（南町）で行われた宣伝飛行に際して、同店は愛用者優待観覧券付の足袋を販売しました。観覧者を載せた列車は、どの路線もすし詰め状態で３万人もの人々が来場しました。当時の新聞記事には「人気湧き立ちたり」「破る限りの大喝采」とあります。

❸自動車で宣伝する志まやたび

一方、同じ年に「志まやたび」は「アサヒ足袋」と社名変更し、大きさの規格に関わらず均一価格での販売を始めました。消費者にとってわかりやすい価格設定は大変な評判を呼びます。増産に追われ、販売高は前年度の４倍と激増しました。

❹収容所の広場に整列するドイツ兵（一部）

5　ドイツ兵捕虜による恩恵

大正４年（1915）、軍都久留米に第一次世界大戦のドイツ兵俘虜収容所が設置されました。ハーグ条約に基づき、捕虜には給与や賃金、義援金、寄付金などの収入があります。捕虜による生活物品などの消費額は市の年間予算額を超える膨大な金額にのぼりました。

また、これらとは別に、下士卒の衣食住は日本政府によって賄われます。この費用も久留米で使用されることになります。久留米の地域経済は、軍隊誘致と捕虜収容所の設置により、絶大な恩恵を受けました。

6　戦後不況を乗り切った久留米人気質

第一次世界大戦が始まると、混乱するヨーロッパや東南アジア、アフリカ市場への輸出が増加し、日本の産業界は未曾有（みぞう）の好景気を迎えました。戦争景気により、国際的な工業国への仲間入りを果たしたのです。久留米の産業界も綿糸関連工業を中心に、堅実に歩んでいました。

ところがついに終戦を迎えます。日本の産業界では、過剰生産物が大量発生しました。株価も３分の１にまで大暴落する戦後恐慌に見舞われたのです。全国で多くの工場や銀行、商店が倒産する中、久留米の商工業界にも不況の大波が押し寄せました。

しかし、久留米地域では被害が比較的軽微でした。なぜなら久留米人は、好景気の中でも派手な事業拡大や投機的事業をしませんでした。時には消極的とも評されるほど堅実だった気質が幸いしたのです。

7　近代的ゴム産業へ

その堅実な経営は、師団や捕虜収容所の消費支出、更には戦争好景気による貯えを温存し、大恐慌を乗り切る素地となりました。不況下にもかかわらず、久留米の産業と経済を力強く牽引したのは、「つちやたび」「日本足袋（アサヒ足袋から改称）」に代表される綿糸関連工業でした。そして、大正９年（1920）には、これまで地場産業を牽引してきた久留米絣の生産額を上回ったのです。

第一次世界大戦後、「つちやたび」では、ドイツ兵捕虜の機械技術者を正式雇用してゴム靴成形機械を改良、ゴム底を貼り付けた地下足袋とゴム靴を研究開発しました。一方の「日本足袋」でもほぼ同時に同種の製品の開発に成功しています。

両社は製造工程の更なる機械化を進め、大正 12 年（1923）以降、地下足袋を主軸とした近代的なゴム産業へと脱皮していきました。長期化する不況の中でも、新たな製品開発を進めて、ゴム底の運動靴、ゴム長靴の生産にも着手しました。両社は競い合い、生産高は飛躍的に拡大して、海外市場にも進出します。

そこに新たに登場したのが、日本足袋から独立した「ブリッヂストンタイヤ」でした。元ドイツ兵捕虜のゴム技術者を雇用し、昭和６年（1931）には国産タイヤを生産開始します。同９年に完成した京町の工場で大量生産体制を整え、同 12 年には本社を東京へ移転させました。久留米発の企業が、中央に進出したのは同社が最初です。この「ゴム３社」が、久留米を軍都からゴム産業を基幹とする商工都市へと導いたのです。

❺ブリッヂストンタイヤの第１号国産タイヤ

※写真❶～❸❺は、『カメラがとらえた久留米の 100 年』より転載。
写真❹は久留米市教育委員会所蔵。